

## ガネフォの背景と出発前

村上(本郷)順三 (74歳)  
(成城大学出身)

私が成城大学を卒業してアミノ飼料株（現：伊藤忠飼料株）へ入社し、2年目（昭和38年、1963年）の秋風の吹く頃でした。慶應大学水泳部のOBでゴールキーパーの井形さんから「今年の11月にインドネシアに於いて『ガネフォ』が開催されるので、日本代表水球チームを結成して参加して欲しい」との話がありました。

聞く所によると、この国際大会は、インドネシアを中心に中華人民共和国やソビエト連邦（現在のロシア）が後押ししており、アラブ諸国やアフリカ諸国に呼びかけて、50か国以上、2,000人以上が参加する大会のようです。この国際大会はオリンピックに対抗してインドネシアのスカルノ大統領が主催するものである事を耳にしました。

そこで、今回のガネフォ選手団の団長である「頭山立国氏」（戦前右翼の巨頭、頭山満の孫で慶應大学出身、アジア青年同盟）が、事務所を構える港区新橋5丁目23番、三栄ビル「立東社」へ水球チーム結成にあたり「ガネフォの開催趣旨やその背景を」個人的に聴きに行きました。

頭山氏はこころよく迎えてくれて、  
次のような話をしてくれました。

いわゆる新興国（主に新しく独立した社会主義国家）のスポーツ選手のための大会で、その憲章では政治とスポーツが密接な関係である事が明らかにされている。今回のガネフォ開催のきっかけは昨年（1962年）8月にジャカルタで開催された第4回アジア競技大会に



頭山立国氏（中央右）

インドネシアのスカルノ大統領の親中国、親イスラム諸国の意向により中華民国（台湾）とイスラエルが招待されなかった事が発端となっている。

このような方針は、国際オリンピック委員会（IOC）が政治とスポーツを切り離すように努めてきた主義に抵触するものであった。また、中華人民共和国は、中華民国（台湾）がIOC加盟国として存続する事を否定していた為、当時IOCを脱退していた。

そこで、IOCは、第4回アジア競技大会は正式競技大会として認めないとの方針を表明、そして今年（1963年）4月にIOCがインドネシアのIOC加盟国

としての資格停止（オリンピック出場停止）を決議した。これに対抗してアラブ諸国の12か国が、来年（1964年）開催予定の第18回東京オリンピックのボイコットを示唆するなどの対立が強まって行った。

そしてついに、インドネシアはIOCを脱退し、ソビエト連邦、中華人民共和国を中心とする社会主义国及びアラブ諸国、アフリカ諸国に呼びかけてオリンピックに対抗する総合競技大会を開催する事を発表した。それが、今回のガネフォ（GANEFO）（新興国スポーツ大会）であるとの説明を受けた。

その様な関係からIOCや国際水泳連盟（FINA）は、ガネフォに参加する選手はオリンピックに参加する資格を失うと表明した。

その為、日本水泳連盟では、来年（昭和39年、1964年）10月に開催される第18回東京オリンピックの出場予定選手は派遣しない事となり、その次のレベルの選手が選ばれるようになった。

その話を聞き、私なりに参加すべきかどうかを検討した。

私が入社したアミノ飼料㈱は、味の素㈱と伊藤忠商事㈱によって昭和36年（1961年）2月に設立された新しい会社で、家畜や家禽の配合飼料（エサ）を製造・販売しており、当時伊藤忠商事㈱から当社に出向していた古川欣一取締役業務部長（私の直属上司）にガネフォに参加する事は、どのような影響があるのか？また、どうすれば良いか？を相談した。

数日後、その回答は次のようであった。「日本の総合商社としては、対インドネシア（スカルノ大統領）との友好関係の維持、継続、発展を望んでいる事からインドネシアに協力し参加することは望ましい事であり、伊藤忠商事㈱としても今後の取引上 参加・協力した方が有利になると思う」と言って、参加する事に何の抵抗も無く、逆に参加する事を勧められた。

一方、スカルノ大統領はとても親日家で知られており、当時日本の女性（私と同年の根本七保子さん「デヴィ夫人」）を大統領第三夫人として迎えていた。また、当時の皇太子（今上天皇）御夫妻や池田首相も友好の為にインドネシアを訪問していたので、ガネフォに参加する事に勇気が湧いて来た。

たとえ日本水泳連盟が「行くな」と言っても、日本全体と日本の国益につながるので、参加する事はより良い結果となる事が明白になった。仮に、日本水泳連盟から除名されたとしてもそれは私自身だけの事であり、たとえ我が身を犠牲にしてでも日本国全体の為に、また日本国の将来の為に役に立つのなら、ぜひ尽くしたいという「大志」を持って行動するようになった。

そして、ガネフォに参加する選手が決まった所で、日本水泳連盟が国際的立場に於いて不利にならないように配慮して、菅久キャプテンをはじめ参加するメンバーと相談して12名の脱退届を私が毛筆で書いて、日本水泳連盟にいさぎよく

提出した。(その後、何年かが過ぎて日本と中国の関係が改善され、我々 12名は日本水泳連盟への復帰が叶えられた。)

脱退届を提出するまでは、我々は極秘に動いていた為、日本水泳連盟は誰が参加するのかはっきり分からなかった。ある日のこと、日本水泳連盟から依頼されたものと思われるが、成城大学時代の監督である村瀬友三郎さんから私の会社のデスクに電話が入り、「ガネフォには参加しないように・・・」との話があった。しかし、その時すでに心は決まっていたが、問題が大きくならないように「はいはい、承知しました」と軽く返事をしておいた。

大学時代に大変お世話になった監督さんに嘘をつくのは申し訳なかつたが、後で分かってもらえると思っていた。そして、ガネフォからの帰国後は何の問題もなく、逆に「よく行ってきたね。良かったね・・・」と言って下さった。

我々は出発までの間に練習もしなければならないので、伊豆の峰温泉(菊水旅館)での合宿練習も私が計画し、実施した。

この峰温泉は、私が山城高校を卒業して、成城大学へ入学した最初の春の合宿練習で使用した思い出に残る温泉プールであり、10月でも泳げる25mプールがある。懐かしくガネフォ行きの皆さんと共に練習に励んだ。このプールは水深が低く、どの場所でも立つ事が出来るので水球には向かないが、水球のボールを持って行きハンドリングの練習は出来た。また、体力づくりや泳ぎの練習に十分成果は上がった。

ガネフォ出場の日本水球チームのメンバーは、全員社会人であるため世話役としては連絡・通知に苦労した。現在のように携帯電話やFAXがある時代ではなく、会社の業務が終わってからメンバーの自宅へ電話連絡か、電報を打たねばならなかつた。また、東京だけでなく地方に居る者もあり、全員へのスムーズな連絡には神経を使い大変苦労もしたし、体力的にも精神的にも疲れていた。

そんな折、慶應大学水球部OBでローマオリンピック出場、当時アサヒビール勤務の山本健様(通称:ゴンさん)【注:山本健さんは、地震博士 今村明恒東大教授(関東大震災の予言者)の長女である山本紀子様の次男です。なお、三男は、成城大学水泳部OBの山本勉さん(通称:アーボー)です。】そのゴンさんが東京の練馬区にあるアパートの一室を借りて、電話も付けてくれて、そこを拠点に連絡・通知しなさいと無償で提供してくださつた。とても有難かつた。それによつて私は大変助かつた。お蔭でそれ以降は、連絡・通知がスムーズに行き、そのアパートで皆と打合せも出来た。そしてチームが一致団結した。

その御礼に、菅久キャプテンと相談して、インドネシアの最高級製品である「極楽鳥の剥製(ハクセイ)」をお土産として持ち帰つた。困つた時に助けて貰つたことは、一生懐かしいものである。その節には有難う御座いました。

いろいろ苦労したが、ガネフォに参加した事は、その後の私の人生に於いて、「何事も大志を抱き、一生懸命がんばれば乗越えられる」という自信につながり、良い経験をさせてもらったと感謝している。

第1回ガネフォ（新興国スポーツ大会）は、昭和38年（1963年）11月10日から約2週間のスケジュールで開催され、52か国 2,700人が参加した。中華人民共和国からは有力一流選手が出場し、多くの種目で金メダルを持っていった。当時のソビエト連邦（現在のロシア）は、社会主義国家の団結を示すためガネフォに多くの選手を派遣したが、IOCに於いても立場を悪くしないようするため、日本と同じくオリンピックへ出場するレベルの次のレベルの選手達を送り込んで来た。しかし、陸上競技、重量挙げ、アーチェリーに於いては、世界記録が樹立されるほど盛り上った大会であった。

ガネフォ開催2年後の1965年9月30日にインドネシアで起きた軍事クーデターでスカルノ大統領が失脚し、インドネシアと中華人民共和国の関係は、以前ほど強力なもので無くなり、第1回ガネフォ開催から4年後の1967年にエジプトのカイロで開催が計画されていた第2回ガネフォ大会は中止となった。一方、国内でもガネフォ帰国後、翌々年に「ガネフォ2周年祝賀会」が目白の「椿山荘」にて行われて以降は、その後開催されなくなった。

しかし、我々日本水球チームの団結は固く、50年もの間「ガネフォ会」は続いている。ただ残念なのは、3年前（2011年）の4月、我々のキャプテンだった菅久尚武さんが亡くなられたのがとても寂しい。

しかし、新たに山本ゴンさんを迎えて、新しいメンバー構成でガネフォ会を続けて行きたいと思っている。



ガネフォ会（2010年10月1日 六本木クインズ・Q）